

F. Cizek の美術教育に関する調査・研究(1)

茂 木 一 司*・石 崎 和 宏**

(1988年10月15日 受理)

A Research on Art Education of Franz Cizek (1)

Kazuji MOGI* and Kazuhiro ISHIZAKI**

1 はじめに

本研究は、創造主義美術教育のパイオニアであり、戦後の民間教育運動（創美）を通じて、わが国の美術教育に多大な影響を与え、現在でもその美術教育理念を支えるオーストリアの美術教育家フランツ・チゼック（Franz Cizek, 1865～1946）の美術教育理論および実践に関する調査・研究である。研究の動機は、茂木が美術教師教育を検討する際、小学校教員養成課程いわゆる美術非専門学生の美術教育の導入教育として、担当講義「美術科教育」（これは「教職専門科目」であり、通常の免許科目名としては「図工教材研究」と「美術科教育法」を合わせた科目である）の期末試験に課していたW. ヴィオラ著『チゼックの美術教育』（Wilhelm Viola: Child Art, University of London Press Ltd. London, 1942 久保貞次郎・深田尚彦訳 黎明書房 1976年）の感想文レポートを分析した⁽¹⁾のがその発端となっており、石崎が1987年のINSEA ハンブルグ大会出席の際にウィーンに立ち寄り、1985年にウィーン市立歴史博物館で開催された「フランツ・チゼックー美術教育開拓者ー1865～1946」展（6.20～11.3）のカタログ⁽²⁾を入手し、その後の詳細な文献検索を経て、本年8月から9月にかけて再度ウィーンに資料収集に出かけた成果が基本となっている。

チゼックの人気の秘密とは何か？なぜ人々の支持を得るのか？本研究の直接の動機は、このチゼックの人気の解明にその端を発している。チゼックの日本におけるまとまった紹介が友人のヴィオラによる（本人が書いたものではない）『Child Art』をほとんど唯一とするにもかかわらず、わが国の美術教育界におけるチゼックへの圧倒的な支持はみのがせないものがあるように思われる。チゼックの研究とは、単に歴史的事実の研究にとどまらず、美術教育の本質に、そして現代の緊迫する教育問題そのものの解決に連なる重要な問題と捉えている。それは、著者が以前指摘した

* 鹿児島大学教育学部美術科

** 筑波大学大学院芸術学研究科

●表1 日本におけるフランツ・チゼックに関する文献年表

年 代	著 者	題 名	出 典	備 考
【戦前】				
1927 (昭2)	宮下 孝雄	チェツカ教授の教室から ーウキーン工芸学校の児童画ー《大正10年》	『私の観たる欧州美術館』東邦堂	『美育文化』第25巻1号に再掲載 31～32頁
1929 (昭4)	霜田 静志	欧米の美術教育9 オーストリー	『学校美術』12月号	未見
1936 (昭11)	石井 柏亭	欧米諸國に於ける近代の 児童美術教育〈オーストリア〉	『現代教育學大系 各科篇第17巻 美術教育論』成美書店 57～61頁	
【戦後】				
1923 (昭23)	外山卯三郎		『学校美術4』多色刷り4頁	未見
1949 (昭24)	ヴィオラ 久保貞次郎訳	『子供の絵はどう指導したらよいか』	自費出版	Child Art の第10章質疑 応答の部分訳
1951 (昭26)	トムリンソン 久保訳	『藝術家としての子供たち』	美術出版社 18～23頁	
1952 (昭27)	ヴィオラ	『美術教育と教師』	自費出版	未見. Child Art の第5 章教師の部分訳?
	久保貞次郎	児童美術のために	『みづゑ』544号 美術出版社 1～55頁	
	ヴィオラ	『創造主義美術教育への 反駁』	自費出版	未見. Child Art の第11 章批判の部分訳?
	霜田 静志	幼児の絵の指導	竹田俊雄・霜田・久保共 著『児童画の見方と指 導』金子書房 27～104頁	
	宮武 辰夫	チゼックの児童アート ・クラス	『幼児の絵は生活してい る』栗山書房 130～131 頁	1978年に文化書房博文社 から復刻
1953 (昭28)	勝見 勝	児童画の美学	『アトリエ』316号 (6月 号) アトリエ出版社 67 ～75頁	
1954 (昭29)	霜田 静志	オーストリアの美術教育	『現代世界学童美術全 集』河出書房 20～21頁	
	ヴィオラ 庄司浅水訳	創造主義による児童美術 についての諸問題	『美育文化』1月号25～ 30頁, 2月号26～30頁	Child Art の第11章批判 の部分訳
1955 (昭30)	ヴィオラ 久保訳	子供の絵はどう指導した らよいか (改訂版) チゼック, フランツ	創美東京支社	
1956 (昭31)	霜田 静志	外国のようす〈チゼック の偉業〉	『造形教育大辞典』不昧 堂書店 第三巻 1140頁 『教育講座 子どもの美 術』美術出版社 101～ 104頁	
	勝見 勝 室 靖	美術教育の系譜 (西洋) 現代美術教育の思潮〈創 造的美術教育〉	『美術教育講座 原理編』 金子書房 36～51頁, 69 ～79頁	

1958 (昭33)	リチャード ソン 稲村退三訳	『愛の美術教師』〈チ ゼック教授の求めたも の〉	白揚社 137~143頁	Marion Richrdson: Art and The Child, 1954, University of London Press., Ltd. の全訳 ⁽⁴⁾
1960 (昭35)	霜田 静志	チゼックの児童画観 フランツ・チゼックと美 術教育 チゼックの偉業	『児童画の心理と教育』 金子書房81~86頁, 273~ 278頁, 309~315頁	
1961 (昭36)	久保貞次郎	チゼックと20世紀の美術 教育	『教育美術』第22巻7月 号 3~6頁	
1964 (昭39)	霜田 静志 久保貞次郎	美術教育の父フランツ・ チゼック チゼックと20世紀の美術 教育	『絵にみる子どもの心 理』東都書房 3~6頁 『児童画の世界』大日本 図書 82~92頁 創造美育協会	解説の他カラー図版3枚 『教育美術』第22巻7月号 の再掲載
1968 (昭43)	ヴィオラ 久保 訳 霜田 静志	子供の絵はどう指導した らよいか (改訂版)	『芸術及び芸術家の心 理』造形社 『創造美育』冬季号	未見
1969 (昭44)	ヴィオラ 棚橋民子訳	子どもの美術とプリミテ ィブ・アート	『美育文化』第22巻8月号 22~23頁 『美育文化』第25巻1月号 30頁	未見. Child Art の第2 章子どもの美術とプリミ ティブ・アートの部分訳?
1972 (昭47)	島崎 清海	フランツ・チゼックー子 供の絵を発見したー	同上 32~34頁	霜田著『児童画の心理と 教育』から掲載
1975 (昭50)	熊本 高工 霜田 静志 馬客談 李英輔訳	チゼック回顧 フランツ・チゼックと児 童美術 チゼック・アート・クラ ス訪問記	同上 34~40頁	『百代美育』(台湾の美 術教育雑誌) 1974年16号 から掲載
1976 (昭51)	ヴィオラ 久保・深田 尚彦訳	『チゼックの美術教育』	黎明書房	Wilhelm Viola: Child Art, University of London Press Ltd., 1942の全訳
1978 (昭53)	尾崎恵子	フランツ・チゼックの児 童画観についてー自由と 創造をめぐるー	『西南学院大学児童教育 学論集』第5巻1号 53 ~65頁	
1982 (昭57)	久保貞次郎 宮脇 理 宮脇 理	フランツ・チゼックの児 童画教育 主体は子どもの側にあり ーチゼックと山本鼎ー造 形教育の西と東ー 美術教育と児童の世紀ー フランツ・チゼックのシ ステムなきシステムー	『美術教育論ノート』開 隆堂出版 26~31頁 『実践造形教育大系 現 代子ども像と造形教育』 開隆堂出版 74~83頁 『教育美術』〈図解美術 教育史〉第43巻7月号 39頁	
1985 (昭60)	茂木 一司	チゼックの美術教育実践 について概説せよ	『美育科教育の基礎知識』 建帛社 27頁	

1986 (昭61)	茂木 一司 長田 謙一	美術教育と教師教育－ 『チゼックの美術教育』 の感想文の分析を通して－ フランツ・チゼックと20 世紀美術－ユーゲント シュティールからアバン ギャルドへ－	筑波大学芸術教育学研究 誌『芸術教育学』第1号 42～72頁 『美育文化』第36巻9月 号 58～63頁
1988 (昭63)	石崎 和宏 遠藤 敏明 熊本 高工	芸術教育のパイオニア－ フランツ・チゼック－ 20世紀・児童画の誕生フ ランツ・チゼック フランツ・チゼックの偉 業	『教育美術』第49巻1月 号 24～26頁 『児童画の歴史』三晃書 房 18～25頁, 110～121 頁

ように、チゼックの偉業とは、「それが当時の社会の芸術領域と教育領域へ向けられたアンチテーゼであること、いわば美術と教育の両面に歴史的足跡を残す輝くエポックであったこと」であり、「つまり、その重要な点は美術のみ、教育のみに向けられたのではなく、両者が本質的・有機的に統合された形式、すなわち心理学よりも先に美術教育そのものの実践によりなされたことである。いいかえると、美術教育の在り方の視座が、美術教育史上初めて具体化された場面であった」⁽³⁾と捉える問題意識である。

本研究は、そのような意識を踏まえ、まずチゼック研究のために必要な正確な基礎資料作りを目的としている。それは、当然これからの分厚い美術教育研究のために不可欠の方法と思われ、本稿では、その第一報として、チゼックの日本への紹介・移入とその研究についての調査とチゼックの履歴を中心に報告したい。

2 日本におけるチゼックに関する資料

日本におけるチゼックの文献は、戦前ではわずかに三編が確認できるのみである。しかし、日本人のチゼック・スクールの訪問者はもっと多かったらしい。ウィーン市庁舎の中にあるウィーン市立図書館に保存されているスクールの訪問記録名簿⁽⁵⁾に1930年に玉川学園の小原國芳（名簿には原國芳と記載）や田中千代（服飾家）⁽⁶⁾の名前が確認されており、その他にもかなりの日本人の訪問者があったらしい。これに関しても引続き調査していくつもりである。

文献を年代の古い順に見ていくと、宮下孝雄（1905～1970）⁽⁷⁾のものは題名のとおり、チゼック・スクールの訪問記である。宮下の訪問記も他のそれと同様、チゼック・スクールの自由でのびのびとし、しかも熱心な子どもたちと適切な指導でそのすべてを包み込んでいるチゼックの様子をありありと描き出している。

「……チュツカ教授は暫く然かも熱心なる暗示に耳を傾けてからそれに対し、児童の創案を損傷しない程度に充分に可能性を与えるために一々答弁を与えた。すると勝手な話合いをしていた小さな人達はバタッと話を途絶やして一生懸命に画用紙に向かって何やら描き出したのであった。

そして彼等は何らの躊躇もなく、臆面もなく紙に思うままを描くのであった。」

「児童の心理を成る可く尊重して、然かも誤らない程度に善導し様とするチェツカ教授の生徒たちに對する訓示が如何にも理解あるやり方で然かも夫々興味を与えるものである。それは干渉ではない。注意であり、善導である。放任ではない。所謂自由画という放任教育ではない。教育という意義に於ては常に児童の絵画に對する練習として、鋭い目を自然に放つということも与えている。」⁽⁸⁾

どのような訪問であったかは不明だが、この記述から宮下が（たぶん短い訪問であったにもかかわらず）チゼックの教育の本質をつかんでいたことがうかがえる。また、絵画だけでなく図案（切紙細工、リノリウム彫刻、石版々画）をも例にひき、作品の出来ばえのすばらしさを指摘していることは、著者がかねてより思っていた、チゼックがあんなにも世界的に受け入れられたのは、チゼック・スクールの作品の出来ばえにあることと共通し、興味深く読んだ。

霜田静志の文献は未見であるが、『児童画の心理と教育』の記述や自伝的な「わが思い出」⁽⁹⁾によって知ることができる。熊本高工氏が、「日本で一番早くチゼックを紹介したのは霜田静志」⁽¹⁰⁾と指摘するように、霜田によって意図的に初めてチゼックが日本に紹介されたのであろう。「わが思い出」によれば、霜田は1928年のチェコスロバキアのプラハで開かれた第6回国際美術教育會議に岡登貞治、石野孝とともに日本代表として参加し⁽¹¹⁾、「同志の人々の案内役を承って出かけ」⁽¹²⁾、その折りのチゼックの業績との出会いを感動的に述べているが、一方せっきくの収穫も日本にはまだ受け入れる土壤がないことを惜しんでいる⁽¹³⁾。

「……私にとっての大きな収穫の一つは、フランツ・チゼックの業績をじかにみることができたことであつた。チゼックが児童美術のために貢献した功績がどんなに大きなものかは、戦後久保貞次郎氏らによって紹介され、賞揚され、それによって創造美育運動に大きな拠りどころを得たのであつたが、このチゼックのことは二十年も前から私は知っていた。この時期の會議では、チゼックには会えなかったが、彼の弟子の指導ぶりを見、またチゼック指導の児童画作品を見、その出版物を求めて持ち帰ることもできた。そこで帰国後、私はチゼックの業績を紹介、日本の美術教育家たちに、この方面の注意を促したが、當時は殆ど顧みられなかった。私は、余りにも先走りすぎたのであろう。どれもこれも私の開拓したところのものは、二十年、三十年の後に至ってやっと芽を出し、花を開くという有様であつた。」

チゼックの業績を正當に評価し、1920～30年にかけて頻繁にスクールを見学し、その成果を自国の美術教育に生かしたアメリカやイギリスに比べ、當時の日本の状況は現在の教育状況を暗示するかのようである。その原因について、『児童画の心理と教育』では、「その頃は山本鼎の自由画論の影響を受けて、子供の図画はもっぱら風景・静物の写生に終始していた状態であつたので、チゼックの如きは、私が彼の指導した作品を多くの人々に見せたり、その主張するところを説いたりしたのもかかわらずごく少数の人々がこれに注意を払っただけで殆ど問題にされないで過ぎてしまった」⁽¹⁴⁾と述べている。ともあれこのことから、そしてその後の著述や活動からしても、霜田を日本におけるチゼックの最初の紹介者であり、研究者であると言えるだろう。霜田の文献は年表にあげ

ただけでも七点あり、数の上でも他に抜きこんでいる。文献から霜田のチゼック観を見ていこう。

創美の児童画研究書の中でも比較的初期に出された『児童画の見方と指導』所収の論文「幼児の絵の指導」は、幼稚園や保育所における幼児画の実際の指導のための理論を特に心理的な面から解説したもので、チゼックは第2章「児童画の研究」の第2節「芸術としての児童画」で触れられており、つまり児童画研究史上の重要な人物と位置づけられているのである。霜田は、チゼック即ち児童画の発見は、19世紀末の印象派以降の美術観（絵画観）の急変と20世紀の児童の発見によってもたらされた児童画への心理学的アプローチによって基礎が作られ、それらが美術（芸術）教育の実践として初めて彼によって成立されたと捉え、チゼックを美術教育の真の意味でのパイオニアであると捉える。

「児童画の芸術的価値は、このように最初は心理学者たちによって認められたのであるが、それを真に実際の指導の上に活かし、児童の才能を充分発揮せしめるようにして行ったのは、この点に早く目覚めた芸術家や教育家たちであった。ヨーロッパにおいて、この点での先駆者であり、功労者であったものは、ウィーンのフランツ・フォン・チゼック教授であった。

チゼックは当時ウィーン的美術工芸学校の中に、子供のクラスを開いて、七歳から十五歳までの子供を収容し、新しい美術教育を施し、非常な成績をあげた。チゼックの教えた子供たちの作品を、しばしばヨーロッパの各地で展覧されたし、また画集になっても出ているが、子供らしい純真さと、子供独特の表現の美しさは実にすばらしいもので、たちまちこれが評判になった。教育家も美術家も口を極めて賞めるという有様で、これがヨーロッパ世界の美術教育の革新に大きな力となった。」¹⁴⁵⁾

また、チゼックの方法を完全な自由教育であるとし、その美術教育は「児童心理に即した新しい導き方である」¹⁴⁶⁾と述べ、「心理学者でもない、教育家でもない彼チゼックが、これを発見したことは驚嘆すべきことであるが、ひっきょうこれは、彼の子供を熱愛する心、子供のよさを信ずる心、そこから生まれてきた発見であろう」¹⁴⁷⁾と続け、「チゼックの功績は、彼の仕事が学校の図画教育の革新を促すことに役立ち、大きな影響を与えた事実にある」¹⁴⁸⁾とまとめている。この文献のチゼックに関する記述は、巻末の注から分かるが、R. R. Tomlinson: Picture Making by Children, 1934と同じ著者のChildren as Artists, 1944（『芸術家としての子供』）のまとめである。

「オーストリアの美術教育」は、日本ユネスコ美術教育連盟編（監修 伊原宇三郎、上野直昭、金森徳次郎、小塚新一郎）『現代世界児童美術全集4 ヨーロッパ3』¹⁴⁹⁾に所収される文献であり、各国の児童画作品を載せ、その解説として書かれたものである。他の国がまとめた解説なのに比べ、オーストリアは短文ではあるが、霜田がわざわざ節を設けて書いているということは注目される。内容は、「発達の概観」と「芸術としての児童画」の二節に分かれる。前半ではオーストリア美術教育史上のチゼックの位置づけを述べている。オーストリアの図画教育も日本と同様、臨画教育から出発し、写生主義を経て、チゼックのような創造主義に至る。チゼックの美術教育界全体に対する影響は前の文献と変わらないので省略するが、オーストリアにおいて、チゼックの方法を一

般の学校教育に取り入れ、成果をあげたりヒアルト・ローテの記述は興味深い。

「オーストリアにおいて、チゼックの方法を取り上げ、これを一般の学校教育に及ぼし、美術教育の革新をはかったのはローテであった。ローテはチゼックが純粋に芸術的な行き方であるのに対し、彼はもっと知的な教育を加え、どこの学校でも、どんな教師でもやれる方法として、これを普及せしめることに力をつくした。即ち、子供の記憶空想の表現はあくまで尊重するが、また必ずしもそれだけに捉われず、必要に応じては写生もさせれば、参考として模写を見ることも敢えてとがめなかった。ただ美術教育の中心とするところはあくまで子供の創造的表現であらねばならぬとした。これによってオーストリアの美術教育は、著しい発展をとげることができた。」²⁰⁾ 後者は、『Child Art』の抜粋である。最後に同時代のフロイトの精神分析学の影響について触れているが、「フロイトにこれを学んだ様子はない」²¹⁾と否定している。もう一つ気になる部分があるが、それは「チゼックは自分の著書を残していない」²²⁾という点である。

『教育講座 子どもの美術』所収の「外国の様子」は、後に『児童画の心理と教育』に「第三部 美術教育 八美術教育の歴史」として再掲載されたものである。内容は、「盛んになった美術教育」「二つの起源」「児童研究と図画教育の革新」「チゼックの偉業」「その影響」「総合美術教育と生活美術教育」「構成教育」「国際美術教育会議」「世界各国の美術教育」の九節からなり、そのうち二節がチゼックについての論述である。霜田の美術教育の基本は、「人間教育として」²³⁾の美術教育であり、その観点から（手放しではないが）戦後盛んになった美術教育を喜んでいる。それは、図画教育がその起源において、もともと工芸の発展のためという実利主義（イギリスが代表）と人間教育（ドイツが代表）という二面を持っていたことによるものであり、これが教育学や心理学に花開いた児童中心主義思想に裏付けされ、後押しされて、チゼックに至るという解釈である。ここで初めてかなり詳しい彼の年譜が出てくる。1897年アルシュレーの助教になり、初めて新しい構想による指導法を実施し、相当な成績をあげたこと、そしてハンブルグ美術教育同盟会長のゲツツェに見いだされ当局に認められることになること、などである。「その影響」では、チゼックの残した影響について、二つの意義をはっきり語っている。一つは、母国オーストリアの美術教育の革新であり、もう一つは、世界の美術教育の革新である。この節で初めてH. リードが登場し、『芸術による教育』（日本語訳は1953年に出版）が紹介されているが、霜田はチゼックからリードへの道こそ美術教育の道であるとし、「チゼックによって開かれた新しい道は、まさにリードに至って強力に基礎づけられた感がある」²⁴⁾と言いきっている。この文献の記述も、注から前の文献と同じ参考文献が使われていることが分かり、トムリンソンの著書のまとめであると思われる。

『絵にみる子供の心理』所収の「美術教育の父フランツ・チゼック」は、霜田が渡欧の際購入してきたチゼック・スクールの作品集から掲載した三枚の作品の解説として書かれた簡単な紹介と似たものである。内容は取り立てて述べるほどのものではないが、この著作は、「児童芸術を理解するための画集として、また子どもの絵を通して子どもの心理を理解しうる実例を提供するもの」²⁵⁾という主旨で作られているため、その大変美しい図版がチゼック・スクールの作品の持つす

ばらしさを本当によく伝えている。

最後に、『児童画の心理と教育』の二つの文献、「チゼックの児童画観」と「フランツ＝チゼックと美術教育」であるが、前者は著書の「第一部 児童画の心理」の「四 芸術としての児童画」の一部であり、内容は文中にもあるが²⁶⁾、『Child Art』の抄訳であるので省き、後者の文献を見ていこう。この文献は、前の「外国の様子」と共通するところは多いが、霜田の論としてかなりまとまっており、その意味で霜田のチゼック文献の代表と言ってよいと思う。四節の中からそれぞれ中心になる言葉を引用してみる²⁷⁾。

「Ⅰ フランツ＝チゼック (Franz Cizek) が今日の美術教育に新しい道を開いた偉大な美術教育者であったことは、今ではこの方面にたずさわる人は、殆ど知らない人はないほどになっている。」

「Ⅱ チゼックの出現した時代は、美術教育にとってどんな時代であったか。……心理学者の間には、これに対する異常な興味が起こり、多くに研究業績が積み、その結果、児童の図画の創造性と芸術表現に著しく注目せられるようになってきた時代であった。これらの研究の結果から児童の美術教育は必然的に改革を促された。」

「Ⅲ チゼックはこのような時代に生まれた。しかし彼は決してこれらの心理学者の刺激を受けて彼の仕事を始めたのではなかった。彼は彼自身の子どもに対する愛情と芸術的直感から、新たな道を開いたのであった。チゼックの業績を最もよく世に紹介したウイルヘルム＝ヴィオラ (W. Viola) は、児童美術に関してはチゼックが最初であり、心理学の研究はそれに続いたといっているが、事実はまことにその通りである。」

「Ⅳ ではチゼックは、現代の美術教育にどのような影響を与えたのであろうか。チゼックの思想と彼の仕事に最も共鳴し、これによって美術教育の革新をうながした人は、ロンドンの美術教育視学官を30年にわたってしてきたトムリンソン (R. R. Tomlinson) であった。トムリンソンは、……児童画の芸術性を強調し、その創造能力の発展に尽くすべきであることを示唆している。さらにこの考え方は、ハーバート・リード (Herbert Read) などのような美術批評家によって一層力づけられ、美術教育の重要性を多くの人々に認識させるにまで至った。リードは「芸術による教育」を著わし、かつての学校での図画は、教育における一つのアクセサリーにすぎなかったのに対し、美術教育の人間教育としての重要性を認める立場から、今後の教育においては、これが中心的な教科になればならないという主張を述べている。美術教育に対する考え方が、ここまで進んできたことは、結局その根底において、チゼックの革新が大きな役割を遂げたものであること疑いない。

また、今日児童の図画が、児童の内心の葛藤を解決するために役立つ治療的な意味が重視され、心理療法として役立てられるようになってきたことは、児童画の大きな役割の一つとして注目されているが、チゼックはすでに彼のクラスの中で抑圧された子供たちの発散としての図画の役割をも果たしていたことを、ヴィオラが報告している。この方面からもチゼックが新しい道を開いていたことは、いかに彼が児童画に対して鋭い目をもっていただかを物語るであろう。」

以上まとめると、霜田のチゼック観は、「児童中心主義の系譜として『創造主義美術教育』の開拓者としての意義」²⁸⁾ということになるだろうか。具体的には、①子供の絵の重要性を実践によって証明し、それを世界的に広めたことによって、美術教育そのものの存在を世界中に承認させた。②美術教育は教育の付け足しなどではなく、人間教育として、現在の教育を支える中心的な教育にならねばならないことを、チゼックが証明した。③図画教育にはそもそも治療教育的な意味が含まれており、現在の絵画による心理療法の基礎をチゼックは築いた、などにまとめられる。

このようなチゼック観は、他のどの文献にも共通してみられるものであり、霜田がそれらを代弁しているともいえる。前後したが、石井柏亭著『現代教育學大系』所収の「第2章 世界に於ける美術教育」の「第6節 近代の諸傾向 オーストリア」にも同様に見られる。

「美術家を養成することが彼の意志ではない。彼の主なる目的は子供の創造力を發展させることである。それが一度醒めると、人生について凡ての見方がそれに影響されると、彼は信じてゐるのだから。この確信が正しいことの證據（しょうこ）に、彼はその生徒たちが、音楽、文學・政治の如き社会の多方面で成功した例を挙げている。最後にシツェック教授は、自分は心理學者でも児童教育者でもないが、児童教育が常に更新する美術の永久的形態と關係あるものであることを一番にさきに考へつたものであると主張してゐる。

ウキンで行はれた方法は歐州中に擴がってゐるといふ事實を語らずに、オーストリアの項を終る譯にはいかない。」²⁹⁾

この文献（「第2章 世界に於ける美術教育」全体）も、「トムリンソン氏『児童畫』より」の参考文献が示すように、トムリンソンの『Picture Making by Children』の要約と思われる。文献の最後に、「然しながらオーストリアにさへ、シツェック教授の方法とは別種な方法があつて、ツヴァイブリュック夫人、テッター博士、其他によつて唱えられてゐる」の部分は、他にない記述である。もう一つ、それに続く「特に注意すべきは、小學校で授けられる美術に於ける功利的傾向であつて、ローテ教授によつて唱道されたものが甚だ好評を得てゐる」の部分は、霜田の受け取り方と違って否定として捉えられている³⁰⁾。

さて戦前に比べ、戦後は圧倒的に文献の数が多い。外山卯三郎を初めとして多くの人によって紹介・研究されている。ここでは『Child Art』の翻訳『チゼックの美術教育』出版までを見てみよう。年表より一目瞭然であるが、チゼックの単なる紹介というよりも、戦後の美術教育をここまで引き上げ、その牽引的役割をした創美の主導者久保貞次郎氏の功績は、計り知れないものがあると思われる。数年前、あるところで伺った氏の講演で、「私はまだ生きています。（美術教育を学ぶ）若い人の中にはまだ生きていたんですかという人が必ずいる」といった発言は、久保氏が既に歴史的存在になっていることを述べた発言として、著者の心に残っている。付け加えるならば、久保氏個人ももちろんであるが、というよりも久保貞次郎的な存在が歴史（日本美術教育史）の時間軸上でそのときに果たした役割が確実にあったとでもいえようか。

久保氏とチゼックとの出会いは戦前のことであり、その事情について、最も新しい「フランツ・

「チゼックの美術教育」の文献の中で、次のように述べている⁸¹⁾。

「僕とチゼックとの出会いは、1938年の秋サンフランシスコでアメリカの子どもの絵を集めている時、サンフランシスコに赤十字支社の婦人社員から、赤十字発行の「チゼック指導児童画エハガキ集」を2組もらい、もしヨーロッパに行くなら、ウィーンでチゼックに会うように勧められた。1939(昭和14)年の春、ベルリンに行った僕は、ウィーンのチゼック学校へ手紙を書き、ウィーンを訪ねたとき学校を見学したいが許されるかどうかを、宿泊予定のウィーンのホテル気付けで返事を求めた。しかし、返事は来なかった。ずっと後になって分かったことだが、チゼックスクールはオーストリーを合併した(1938年3月)ナチスによって、閉鎖を余儀なくされていたらしい。」久保氏の文献は、もちろん最終的には『Child Art』の完訳に尽きるが、創美運動の起爆剤ともなった文献『子どもの絵はどう指導したらよいか』は見逃せない。この辺の事情についても、「戦後トムリンソンの『芸術家としての子どもたち』によって、チゼックの姿がクローズアップしてきた僕は、1949(昭和24)年の8月上旬、ピオラのChild Art(『児童美術』)を丸善で入手した。この原著はずっと後に、深田尚彦と共訳で黎明書房から翻訳を出した『チゼックの美術教育』の原本である。1944(昭和19)年にロンドンで出たものだった。僕はこの本を通読して、その有益な示唆に満ちているのを見いだして、すぐ翻訳し、謄写版でパンフレットを、1949年9月16日に発行した。このピオラ編の質疑応答はチゼックの指導について、具体的にピオラの、同時にチゼックの考え方を明らかにしている点に興味があった。このパンフレット『子どもの絵はどう指導したらよいか』は、僕が講演する会場にはいつも100冊余りも送られたが、常に供給不足であった。

チゼックの思想は上述の『芸術家としての子どもたち』と『子どもたちの絵はどう指導したらよいか』(俗に「チゼック問答」と呼ばれた)の二つを根拠として、戦後の我が国に普及した。⁸²⁾と述べている。このパンフレットは、この後二度の改訂版を出しており、創造美育運動においてどれほど重要なものであったかが理解される。またそれは、『Child Art』に含まれるチゼックの思想の重要性を示すものでもあり、この本の翻訳が、久保氏の「チゼック問答」の翻訳に限らず、様々な形で活字化されている事実によって確認できる。(年表の『美術教育と教師』=「第5章教師」、『創造主義美術教育への反駁』と『創造主義による児童美術への諸問題』=「第11章批判」、『子どもの美術とプリミティブ・アート』=「第2章子どもの美術とプリミティブ・アート」は、それぞれ部分訳である。)久保氏は、日本の図工教師の中には、チゼックに反感をもった人々も含まれていたが、「戦後盛んになった創造美育運動はチゼックの思想に負うところが多い。これは疑う余地がない」とか「チゼックの主張を創美の教師は信じて従った」⁸³⁾と言いきっている。では何が美術教師に影響を与えたのか。それは、つぎのようにまとめられている。

「① チゼックが若い頃ウィーンで、彼のまわりの子どもたちが、学校で描いた絵と、自由に街路の板塀に描いた絵が、まったく違っていることに気付いた。

② チゼックの研究のプログラムは、単純で簡潔であった。『子どもたちをして成長せしめ

よ、発達させ、成熟せしめよ。』

- ③ 一人一人の子どもは、皆違ったものを持っており、彼は彼独自の技術を発展させる自由を持つべきである。だからすべてどんな子どもにも、技術教育の固定したコースを強制してはいけない。
- ④ 大人の考え方や、方法を子どもの上に押しつけるのはよくない。
- ⑤ 子どもの発達の生まれつき持っている法則に従って、成熟するよう許されるべきだ。
- ⑥ 特にいちばん重要なことは何か。子どもの努力を笑ってはいけない。批評は子どもに同情的に与えられねばならない。
- ⑦ 自然や飾った対象を文字どおりコピーすることは一当時当り前の学校ではこの方法が広くどこでも行われていた—チゼックによれば、アートではない。』⁶⁴⁾

このまとめは、そのまま久保氏のチゼック観でもあり、それは霜田のそれと一致する。つまり、「創造主義美術教育の開拓者」ということである。しかし、二人（の教育）は理念としては一致していたが、進む方向は随分と違っている。両者の違いを単に時代的なことに限定するは適当でないように思われる。この違いもいずれは明らかにせねばならないだろう。

久保氏がチゼックについてまとまって語った文は意外と少なく、もう一つ『教育美術』所収の「チゼックと20世紀の美術教育」があるだけである。これも大変読みごたえのある文献で、最近教育美術振興会創立50周年の記念行事として始まった『『教育美術』50巻を読む』にも掲載されたが、解題者米倉正弘氏が、「とり上げた記事は、第二次世界対戦が終わって間もなく、押さえられていたものが吹き出すように生き返り、広がってきた、理想主義的教育の重要な根拠となった、チゼックに関するもの」⁶⁵⁾と述べるように、当時の運動の雰囲気を実感に伝える文献である。この中で久保氏は、「今世紀において美術教育に最大の貢献をした三者」で自分の「児童美術のアイデアを形成し、いまでも児童美術の思想を堅くささえている」のは、「チゼック、タミジ・キタガワ、アルシュウラとハトウィック」であると述べている⁶⁶⁾。特に、アルシュウラとハトウィックの研究への評価は、霜田の仕事を裏づけるものとして興味深い。

「アルシュウラとハトウィックの研究は幼児の問題である。しかし彼らの探求は、児童全般に光をあてた功績を含んでいる。『児童画と心理』このジャンルについては、彼らのスコープが最も独創的な発見であったと僕は確信する。彼らの発見のラインから、これからの研究者はスタートし、じじついくたりかは、その先の道をきりひらきつつあるといえよう。チゼックの信条は半世紀前から世界の各地で実験され、たしかめられた。アルシュウラたちの研究でさえも、遠く源をたどればチゼックの発見から糸をひいていることは疑う余地がない。』⁶⁷⁾

そして、次のような冷静な判断は、今日の美術教育の問題そのものである。

「ぼくたちは一人のパイオニアだけに、すべてを期待するべきではない。チゼックの歴史的役割は、1920年から30年代のはじめにかけて積極的な意味をもっていた。そののちは、彼の信条の直ささにおいて、インスピレーションを世界中の美術教師のあたえているといえるだろう。』⁶⁸⁾

つまり結論的にいえば、「いまや児童美術の問題は、すぐれた教師の養成という一点に集中されるべき時代に進みつつある」³⁹⁾という問題意識である。この意識は、前出の文献ではもっと厳しい反省と提言になっている。

「チゼックの思想は子どもが内部に持っている才能の無限の発展を信じている点に、大きな困難が横たわっていた。創美の教師たちは、子どもが外部の規律に従わないことを励ます力に欠けていた。外部は規律や標準を求め、教師にそれを強制した。親や園や学校は、子どもの内的力を信ぜず、もっと平俗的な外観を期待した。新しい絵の会のような権威主義的主張が、いっそう子どもたちの自由な発達を妨害した。チゼックの思想が、わが国にじゅうぶんに根を下ろさなかったのは、教師の気力ばかりではなかった。社会がそれを好まなかったのである。自由な精神はいつの時代にも迫害に会う。しかし創美の教師たちが指導した子どもたちの作品は高い水準に達し、将来日本の美術教育の歴史の上でさんざんと輝くエポックをなしたとの評価を得るであろう。そのために児童美術館が設置されて、それらの記録を保存し、とどめておくべきだろう。」⁴⁰⁾

勝見勝の「児童画の美学」と「美術教育の系譜(西洋)」のチゼックに関する記述の部分は、同じものである。勝見のチゼック観も霜田や久保氏と一致する。

「児童画そのものの本質にせまり、その創造性の一そう深い理解に達したのは、オーストリアのフランツ・チツェック Franz Cizek であろう。彼の何よりの強みは、児童画の創造性を正しく理解したばかりでなく、それに基づいて、『児童たちを成長し、発達し、成熟せしめよ』という、単純明快な教育原理をうち立て、これを実践にうつしたことでであろう。……チツェックの立場は、臨床的研究であった。……チツェックは、児童画の創造性をはっきり認め、児童のこの創造性をのばしてやるのが、最も正しい芸術教育法であると考えた。だから、彼によって初めて、二十世紀の児童芸術観は、軌道にのせられたと言ってよい。」⁴¹⁾

勝見の文献にも、文中にヴィオラの『Child Art and Franz Cizek』と『Child Art』の参考文献が出ている。

最後に、宮武辰夫の「チゼックの児童アート・クラス」(『幼児の絵は生活している』所収)であるが、大変興味深い事実が分かった。巻末の参考文献一覧に出ている『芸術家としての子供達』『美術教育と教師』(俵藤寅吉訳)、『図画はどう指導したらよいか チィゼック問答集』の三つの参考文献の他、文中の文章は、DR. WILHELM VIOLA: PROFESSOR CIZEK'S JUVENILE ART CLASS, AUSTRIAN JUNIOR RED CROSS VIENNA 1., STUBENRING 1, AUSTRIA⁴²⁾に基づいていることが分かった。

「この表題の論文はウイヘルム・ヴィオラ博士が書いた重要なチィゼック教授の紹介にもなり、又偉大な児童美術の真の意味の世界的な指導者ともなるので、要所要所を拾い記すことにした。そしてこの立派な行き方の原書を手渡してくれたミス・ピービー女史にも感謝し度い。」⁴³⁾

また、131頁の図187に「ウイン、チィゼック、アート・クラスの幼児画」のタイトルでその本からとったと思われる作品が掲載されている。これまで、日本におけるチゼックの紹介は、トムリン

ソンやリチャードソンのものを除けば、ヴィオラの文献は、『児童美術とフランツ・チゼック』か『児童美術』に限られていると思っていたが、それ以外にもあったということがこれで分かった。これに関しては、今後詳細な調査・検討をするつもりである。

以上、日本におけるチゼックの紹介・研究の歴史を資料紹介を中心に概観してきたが、まだまだ不明な点が多い。未見の文献を含め、今後も継続して検討していくつもりである。

追記：この項を書き終えてから、霜田の新たな文献が見つかった。それは、『幼児教育全集 第六巻 幼児の繪と手工』（刀江書院 1937〈昭和12〉年）の「幼児の繪と其導き方」の「一 子供の繪についての研究」に含まれる「チゼックの偉業」（17～22頁）である。これを含めると戦前の文献は四点になる。この内容については、読報で報告する。

3 チゼックの履歴

●表2 フランツ・チゼックの履歴年表

年 代	Cizek の事績	Cizek 関連資料・美術・教育・一般
1865（慶応元）年	・6月12日、父フランツ・クサーヴァー・チゼック（Franz Xaver Cizek）、母バルバラ・シスコバ（Barbara Cizkova）の次男として、ボヘミアのエルベ河畔にあるライトメリッツ（Leitmeritz）で生まれる。父は実科高等学校等の図画教師であり、美しい筆跡の持ち主であった。兄弟は兄イヴァン（Ivan）、弟カレル（Karel）そして妹マリー（Marie）の4人である。	・日本、学制制定
1872（明治5）年 1885（明治18）年	・ギムナジウム卒業試験に及第し、ウィーンへ行き、最初、工業大学の建築学科に入学手続きをするが、間もなく美術アカデミーに移る。《1885年－1889年：ランプラー（F. Rumpler）、1889年－1895年：トレンクヴァルト（J. Trenkwald）〈歴史画のマイスターコース〉、ラルマン（S. l'Allemand）らの指導を受ける》 ・ウィーン8区のプロリアニ通りの指物職人の家に下宿し、その家の子どもたちなどがチゼックの部屋へきて絵を描いたりし始める。	
1890（明治23）年 1892（明治25）年	・美術アカデミーにおいて展覧会が開催され、「花輪をつくる女」という作品によって校長賞を受ける。	・日本、教育に関する勅語発布
1895（明治28）年	・ミュンヘンで1年間研究し、その後、スイス、フランス、イギリスを旅行する。 ・フランツ・ヨーゼフ皇帝の肖像画を描くよう任ぜられる。	

1897 (明治30) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ウィーン7区, ノイスティフト通りのショッテンフェルダー実科学校の非常勤の図画教師となる。 ・ニーダーエスターライヒ州の教育庁に私立の児童図画学校の認可を請願し, 許可を得る。 ・ハンブルグの美術教師であるゲッツェ(C. Gotze)は, チゼックに関心をよせ, 文部大臣ハルテル(Hartel)に報告している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリムト (G. Klimt) らを中心にウィーン分離派を創設する
1899 (明治32) 年 1900 (明治33) 年		<ul style="list-style-type: none"> ・デューイ (J. Dewy) 『学校と社会』刊 ・エレン・ケイ (E. Key) 『児童の世紀』刊 ・フロイト (S. Freud) 『夢判断』刊
1901 (明治34) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ショッテンフェルダー実科学校の生徒作品を学校創立50周年の際に展示する。 	
1903 (明治36) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストリア・ハンガリー帝国美術刺繍学校に招聘される。(1906年まで教師を務める)同時に, 図画教師養成の指導にもあたる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウィーンで分離派展開催 ・ウィーン工房設立
1904 (明治37) 年 1905 (明治38) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・教授の称号を受ける。 ・オーストリア美術工芸博物館で児童画展を開催する。 ・文部省の委任をうけて, ドレスデン, ハンブルク, ベルリンなどを旅行する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ケルシェンシュタイナー (G. Kerschensteiner) 『描画能力の発達』刊
1906 (明治39) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ウィーン美術工芸学校の中に私的な児童図画学校を「実験学校」(Versuchsschule)として組み入れる。 ・装飾図画・装飾構成課程の指導をする。(1911年からは装飾形態学) 	
1907 (明治40) 年		<ul style="list-style-type: none"> ・モンテッソリー (M. Montessori), 児童の家を始める。
1908 (明治41) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・クリムトらのグループが企画した美術展の第3室にチゼックの青少年美術教室が参加する。 ・第3回国際美術教育会議(ロンドン)に参加し, 子どもの作品を展示する。(ヴィクトリア・アルバート美術館)参加者の注目を集める。 ・イギリス各地を旅行し, 講演をする。(南ケンシントン美術館など) ・シスライサニエン地区の工芸教育の監察官に任命される。 	
1910 (明治43) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・美術工芸学校にある児童のための「実験学校」を, 「青少年美術のための特別課程」(Sonderkurs für Jugendkunst)と名称を変更する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・フロイト『精神分析学』刊
1911 (明治44) 年 1912 (明治45・大正元) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ工作連盟会議(ドレスデン)に出席する。 ・オーストリア美術工芸博物館の春季展に関与する。 ・第4回国際美術教育会議(ドレスデン)に参加し, 展示も行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・モンテッソリー『モンテッソリー法』刊
1913 (大正2) 年 1914 (大正3) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストリア工作連盟の創立会員となる。 ・ケルンで児童画展を行う。 ・『紙の制作, 切る, 貼る』を刊行する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第1次世界大戦始まる。

1916 (大正 5) 年	・フ란ツ・ヨーゼフ勲章の騎士十字勲章を授与される。	・ユング (C. Jung) 『無意識の心理学』刊
1918 (大正 7) 年	・チゼックによって指導されている教室が、フィヒテ通り 4 番にある美術工芸学校の付属の建物の中に移される。	
	・青少年美術教室 (Jugendkunstklasse) と名称を変える。	
1919 (大正 8) 年	・「ウィーン美術工芸学校創立 60 年」展に参加する。	・山本鼎、長野県神川小学校で第 1 回児童自由画展覧会開催。
	・リヒテンシュタイン庭園で「子どもと美術」展を開催する。	・シュタイナー (R. Steiner), シュツットガルトに自由ヴァルドルフ学校を創設する。
		・グロピウス (W. Gropius), ワイマールに「バウハウス」設立
1920 (大正 9) 年	・行政事務官に任命される。	
	・美術工芸学校での「装飾課程」(1924 年まで) の指導を任せられ、ここから「ウィーン・キネティズム」の前衛的な作品が生まれてくる。	
	・イギリス国内で、ロンドンから約 80 の都市で児童画展を巡回する。(1923/24 年まで)	
	・ウィーン、ミュンヘンでも児童画展を開催する。	
1921 (大正 10) 年		・山本鼎『自由画教育』刊
		・ウィルソン (F. Wilson) 『芸術家としての子ども—チゼック教授との対話』、『チゼック教授のクラス』、『チゼック教授の講義』刊
1922 (大正 11) 年	・母死去。	・ウィルソン (F. Wilson) 『クリスマスの絵』刊
1924 (大正 13) 年	・美術工芸学校の「装飾課程」廃止。それは「キネティズム」の終わりをも意味する。	・エルンスト (M. Ernst) らシュールレアリズム宣言を発表
	・別科の「一般形態学」と青少年美術教室は継続する。	・青木実三郎『農山村の図画教育』刊
	・児童画展を合衆国内で 1929 年まで巡回する。第 1 回は、ニューヨークでロックフェラー財団の主催により開催される。	・ウィルソン (F. Wilson) 「メトロポリタンでのチゼック展」(Industrial Arts Magazine)
	・ウィーンで児童画展を開催する。	・岸田劉生『図画教育論』刊
1925 (大正 14) 年	・カストナー (H. Kastner) との共著により、『自由画』を発刊する。	
	・パリの応用美術展に参加する。	
	・モントルー (スイス), オランダで児童画展開催。	
1926 (大正 15・昭和元) 年		・ブリッチ (G. Britsch) 『造形美術の理論』刊
		・ホリスター (M. Holliser) 「美術教育へのチゼックの貢献」(Progressive Education)
1927 (昭和 2) 年	・『子どもたちの色紙制作』《『紙の制作、切る、貼る』(1914) の英訳版》	・ロコワンスキー (L. Rochowski) 『青少年美術 30 年』刊

1928 (昭和3) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストリア共和国のための功績に対し、金の功労章を授与される。 ・第6回国際美術教育会議 (プラハ) とウィーンの夏季講習会で講演をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エング (H. Eng) 『児童画の心理』刊 ・リュケ (G. Luquet) 『子どもの絵』刊
1929 (昭和4) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ロンドンの「美術教師会」の名誉会員になる。 ・ウィーン的美術工芸学校とザルツブルクのエリザベス・ダンカン学校で児童画展を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ムンロ (T. Munro) 「フランツ・チゼックと自由表現方法」 (デューイ編『芸術と教育』) ・アドラー (F. Adler) 「ウィーンのチゼックスクール訪問」 (School and Home)
1930 (昭和5) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・美術工芸学校の学科長に任命される。 	
1932 (昭和7) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動35周年にあたり、ウィーン市の市民に任命される。 ・青少年赤十字の雑誌の9月号に「チゼックが専念した青少年美術教室のすべて」という記事が掲載される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中西良男『想画による子供の教育』刊
1933 (昭和8) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・オランダで移動展覧会開催。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トッド (J. Todd) 「チゼックスクール訪問の印象」 (School Arts) ・エックスフォード (E. Eckford) 「チゼック教授と美術教室」 (Progressive Education) ・レイノルズ (C. Reynolds) 「ウィーンのチゼックスクールの児童美術」 (Childhood Education) ・ドイツ、ナチス政権樹立。 ・バウハウス閉鎖。
1934 (昭和9) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・美術工芸学校の教授を退職するが、正規の助教員として勤務を続ける。 ・南アフリカ〈夏〉、イギリス〈5月、12月〉、スイス (セント・ガル、チューリヒ、ベルン) で児童画展を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラゲス (L. Klages) 『リズムの本質』刊 ・アメリカ、バージニア州、コア・カリキュラム発表 ・デューイ (J. Dewey) 『経験としての芸術』刊
1935 (昭和10) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・スイスで移動展覧会を続ける。 	
1936 (昭和11) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・スウェーデンとノルウェーで児童画展を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴィオラ (W. Viola) 『児童美術とフランツ・チゼック』刊 ・第8回国際美術教育会議 (パリ)
1937 (昭和12) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・美術工芸学校での教育活動を終える。 ・青少年美術教室は、長年の助手であるシミチェック (A. Schimitzek) 女史と一緒に個人的に継続する。その後視力障害が進む。 	
1938 (昭和13) 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツによるオーストリア併合により、美術工芸学校が閉鎖され、チゼックの青少年美術教室も閉鎖する。しかし、青少年美術教室はウィーン4区 	<ul style="list-style-type: none"> ・ローウェンフェルド (V. Lowenfeld) 『創造的活動の本質』刊

1940 (昭和15) 年	のシュヴィント通り17番地の二階の一室に移され続けられる。(1955年まで) ・この頃, 児童美術についてまとめた著者についてイェール大学出版部との間で進められていたが, 結局実現しなかった。しかし, その原稿はウィーン市立図書館に保管されている。	
1942 (昭和17) 年		・ヴィオラ (W. Viola) 『児童美術』刊
1943 (昭和18) 年		・リード (H. Read) 『芸術による教育』刊
1944 (昭和19) 年		・トムリンソン (R. Tomlinson) 『芸術家としての子供達』
1946 (昭和21) 年	・12月17日, ウィーンで死去。 青少年美術教室は, チゼックの死後もシミチェック (A. Schmitzek) 女史によって1955年まで続けられる。	・ロコワンスキー (L. Rochowska - nski) 『ウィーン青少年美術: フランツ・チゼックと青少年美術教室』刊

※この年表は, 次の資料を参考にして作成した。

- ・FRANZ CIZEK PIONIER DER KUNSTERZIEHUNG (1865-1946), Historisches Museum der Stadt Wien, 1985
- ・F. Cizek, Curriculum Vitae, Wiener Stadt-und Landesbibliothek
- ・W. Viola, CHILD ART AND FRANZ CIZEK, Austrian Junior Red Cross, 1936
- ・W. Viola, CHILD ART, University of London Press, 1942 (邦訳: 久保貞次郎・深田尚彦訳『チゼックの美術教育』, 黎明書房, 1976年)
- ・村上陽通・増田金吾『美術教育史ノート』, 開隆堂, 1983年

註

- (1) 拙稿「美術教育と教師教育ー『チゼックの美術教育』の感想文の分析を通してー」(筑波大学芸術教育学研究誌『芸術教育学』第1号 42-72頁)を参照。
- (2) FRANZ CIZEK PIONIER DER KUNSTERZIEHUNG(1865-1946), Historisches Museum der Stadt Wien, 1985
- (3) 宮脇理監修 福田隆眞・福田謹一・茂木一司編『美術科教育の基礎知識』建帛社 1985年 27頁
- (4) この著書は, 現在『リチャードソンが指導したイギリスの子供の絵』(北條聡・淳子訳 現代美術社 1980年)の題名で出ている。
- (5) この名簿は, チゼックの死後もシミチェックによって, 1947-8年頃まで継続されていた。
- (6) 1906年生まれ。日本の服飾デザイナーの草分けであり, スイス・ドイツ・アメリカで服飾を学び, 帰国後「ニューキモノ」で注目をあびる。田中千代服装学園長, 田中千代学園短大学長。著書に『服飾事典』などがある。
- (7) 1905-1970年。戦前東京高等工芸学校教授として, デザイン教育の権威。
- (8) 宮下孝雄「チェッカ教授の教室から」(『美育文化』31頁)
- (9) 霜田静志『芸術と生活と教育と』造形社 1968年 263-334頁 所収
- (10) 熊本高工「フランツ・チゼックの偉業」(『児童画の歴史』117頁)
- (11) 三人が初めて日本の正式代表として参加。『児童画の心理と教育』(325頁)によれば, 霜田が働きかけ, 正木東京美術学校長を委員長に, 山本鼎, 岡山秀吉, 阿部七五三吉東京高師教授, 山形寛東京女高師教授, 長野美術助教授, 佐藤東京市視学などのメンバーで日本委員会を作って対応。実際の会議の出席者は, 他に金沢から出島啓太郎, パウハウスに留学中の水谷武彦, パリ留学中の内藤秀因も参加。

- (12)~(13) (9) 前掲書 290~291頁
- (14) 霜田『児童画の心理と教育』273~274頁
- (15) 霜田他『児童画の見方と指導』41頁
- (16)~(18) (15) 前掲書 43~44頁
- (19) この全集は、全6巻で、1巻から順にそれぞれ「南北アメリカ」「ヨーロッパ1~3」「アジア・太平洋諸島」「日本」のタイトルが付いている。
- (20) (19) 前掲書 20頁
- (21)~(22) 前掲書 21頁
- (23) 霜田「外国の様子」(『教育講座 子どもの美術』93頁)
- (24) (23) 前掲書 107頁
- (25) 霜田『絵にみる子どもの心理』2頁
- (26) (14) 前掲書 82頁
- (27) (14) 前掲書 273~278頁
- (28) (3) 前掲書 27頁
- (29)~(30) 石井柏亭『美術教育論』60~61頁
- (31) 久保貞次郎「フランツ・チゼックの児童画教育」(『美術教育論ノート』27頁)
- (32) (31) 前掲書 27~28頁
- (33) (31) 前掲書 29頁
- (34) (31) 前掲書 28~29頁
- (35) 「『教育美術』50巻を読む 連載17国内外の美術教育—その3」の米倉正弘氏の解題(『教育美術』第49巻10号 1988年 4頁)
- (36)~(37) 久保「チゼックと20世紀の美術教育」(『教育美術』第22巻7号 5頁)
- (38)~(39) (36) 前掲書 6頁
- (40) (31) 前掲書 30~31頁
- (41) 勝見勝「児童画の美学」(『アトリエ』316号 72頁)
- (42) この文献は、ウィーン市立図書館に所蔵されているが、9枚のリトグラフはない。
- (43) 宮武辰夫『幼児の絵は生活している』130頁